

平家物語考

五

和書門			
一	二	一六〇六七	類
二	九	二〇	
冊	架	函	號

庫文閣内			
三	二	和書	
函	冊	號	類
架	冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	16067	
冊數	12 (5)		
函號	203	163	





平家物語考證目録卷五

淺草文庫



考證卷之五

新刊のきし事

中一月凡の事

地怪の事

大場うらるるの事

歌を海屋の事

んーるる乃

老文是あらゆの事

オハル人志ん怪

廿九文 是るりし事

東十伊豆のんせん事

主物 川の事

主又節乃事

行り物るりの事

主ちあはえん事



平家物語考證卷之五

平家物語考證卷之五

松堂閑人四醉生

編

洛陽後學源

道格

羽林中即將藤原定俊

補

初うつりの事

二日卯の刻より幸れし事

治承四年六月二日或秘記云天晴卯刻の幸れ入

道相由福系別業法皇因以渡而城外之宮住

古隆有之例延暦以後都云世後改丁渭希代

勝事を敷云知由結之人類丁被攻南都

云和平之く弓丁る不慮之恐を又餘堂に不体

為禦彼怖畏之云彼之乞不及洛中之志事欲或
況下有遷劫之級強之能忽係幸如竹事祇之指物
惟必有之徵在又云留洛陽之案中可有可嘉刑之
志之吳儀給紙卷紙級橫編素考賤以伴天為
事只天魔謀滅胡家丁想之遷幸儀以尺物之信紙之
自八系運之草津武士數千騎二引並電天幸治先
入道相玉智臣形與 次女車一乘 次女房輿二
二房及格
政之室家
次引幸 鳳 鞏 供奉人々 乙口四人
凡大為實足 別南時忠 宰相中為 實守
迎親
平近衛司 左中將泰親朝臣 右中將隆房朝臣

職事以前亮重衡朝臣 以并總房朝臣

隆房朝臣著袴衣裝束 袴衣 布衣 白袴 後之 兼腰中
袴胡線 螺 鈿野 釵 有 鹿 箱

是城外之儀云々 右以不被可公如此事丁依時宜

事也 右少隨身持衣小袴烏帽云々

次標政 兼車 前致二人
后上人二人 騎馬在車後

次內侍所

養人凡如衣引隆 凡如右有房朝臣亦作也

各騎云々

次御電津

上下右衛門督實家 凡右少衣兼忠各乘車但依
伴自草津西京云々

次冲幸

公卿 冲大纳言隆季

前大纳言邦綱

殿上人 九如通資朝臣

月時實朝臣

右中文兼光朝臣

正丁後
仍務

中務權大補經家朝臣

右京大夫信行朝臣

安藝守在經

已上京出許之或没在經可系福系之

次出車二支

次前大将宗盛卿 駕手輿

今夜就大物 内曉冲福系

内裏 平中綱之杜造家

上皇 祿口之別庄

法皇

平宰相教養家

松政

安不寺別当在能房之

系入案及以云宿下如互道路之

三日記云付使將送松院女房及邦綱之許 ○四日

記云今日以使去觸白地一系入之也松邦綱人多系

入之 ○六日記云松邦綱之許使去由東云隆白地云

中宿下云系系不叶也只今一切事云而松相為止

又何形勢自是今一五日之月以在將之令中云

又云十四日夜之上自松盤家遷冲祿口別庄 本上皇
口下也

別后君給云 家之松盤叙正二位一奉延右大納殿不可

後云云 余令不為苦物取之在不足締是此勿論云

そのいふとける

補大納言平時忠ノ妻太宰帥藤原頭時ノ女

甲子年ノ日影畫家れちりて正二位志多丸系履
れ心子右大臣良通のまが階こつととせり

見干上

又福系一匹をりより何面よきと極して口一つあり
しるゆゑにそれ極とせり

此事無所考或秘記曰以平宰相教盛家為法皇之
宮居則此一節恐為虚談乎

かのいふとける

補神代卷ヲ按ルニ何レノ年ニ葺不合尊崩

ノ神武天皇ノ寶祚ヲ継玉フト云コト考フべ
カラス神武天皇ノ本紀ヲ考ルニ十五ニノ太子
ニ立トアルトキハ是時葺不合尊ノ統御ト
見ヘタリ此ノ後甲寅歲始メテ東征ス是時
神武天皇四十五歲ナリシカレハ是ノ中間
二十年ノ間ニ尊崩メ天皇位ヲ継ゲルナリ
ベシ○古事記云神倭伊波禮毗古命與其
伊呂兄五瀬命ニ柱坐高千穗宮云々按ルニ
高千穗ハ宮崎郡ニ屬セルモノカ

五十九年と云ひ

補按ルニ神武天皇己卯ノ年五十九歲ナリ

神代天皇よりをいひて天皇は十二代ハ大和の宮に
移して遷都ハ終つたものと

補日本紀綏靖天皇九年都葛城是謂高丘

宮安寧天皇二年遷都於片鹽是謂浮孔

宮懿德天皇二年遷都於輕地是謂曲峽宮

孝照天皇九年遷都於掖上是謂池心宮孝

安天皇二年遷都於室地是謂秋津嶋宮孝

靈天皇遷都於黑田是謂廬戸宮實孝安天皇
百二年也

孝元天皇四年遷都於輕地是謂境原宮開

化天皇元年遷都於春日之地是謂卒川宮崇

神天皇三年遷都於磯城是謂瑞籬宮垂仁

天皇二年更都於纏向是謂珠城宮景行天皇

四年更都於纏向是謂日代宮又五十八年幸

近江國居志賀是謂高元德宮

さい心天皇元年より

補古事記ヲ考ルニ近淡海ノ志賀高元德宮ニ

坐トアレバ景行天皇ノ所都ヲ改メズノ都スル

ナリ新ニ都ヲ立ルニハアラス

ちりりい天皇二年より

補日本紀仲哀天皇二年興宮室于元門而居

之是謂元門豊浦宮元門拾芥抄云弘仁九年

改長門國

ちくせんの玉ころりたけ

補日本紀神功皇后攝政元年十二月生譽田天皇
於筑紫故時人号其産處曰宇添也

之後神功皇后ハ云

補磐余大和ノ名所ナリ藻塩草十市郡云
留同ニク大和ノ名所ニノ万葉集ニ天飛ヤ迦留
ノ社ノト云是ナリ高津撰津國ノ名所ニノ和歌
ニ詠セリ今カウヅト云是ナリ日本紀云神
功皇后三年都於磐余是謂若櫻宮古事
記云品池和氣命坐輕島之明宮治天下也
日本紀云仁德天皇九年都難波是謂高津

宮又云履中天皇九年即位於磐余稚櫻
宮反正天皇九年都於河内丹比是謂柴
籬宮古事記云男淺津間若子宿禰命
坐遠飛鳥宮治天下也飛鳥ノ飛鳥トハ
枕詞ナリ日本紀安康天皇三年十一月
雄略天皇命有司設壇於泊瀨朝倉即
天皇位遂定宮云云二十一年遷都ノ事
諸記ニ所見ナシ日本紀云繼躰天皇五年
遷都山背筒城十二年遷都弟國又云宣
化天皇九年遷都于檜隈廬入野筒城ハ
今ノ綴喜ナリ弟國ハ今ノ乙訓ナリ檜隈

八大和ノ名所十リひのく由入聖のふのト
古歌ニ詠セル是十リ日本紀云孝德天皇
大化元年十二月遷都難波長柄豊崎云々
又云齊明天皇二年九月遂起宮室天皇
乃遷号曰後飛鳥岡本宮云々又云天智天
皇六年遷都于近江云々大津宮古歌ニ多ク
詠セリ又云天武天皇元年九月自嶋宮移岡
本宮是歲宮宮室於岡本宮即冬遷以居焉
是謂飛鳥浄御原宮云々又云持統天皇六
年四月鎮奈藤原宮地奉幣于四所大神
告以新宮云々續日本紀元明天皇和銅元

年詔畧曰方今平城之地四會叶圖三山作

鎮龜筮並從宜建都城云々

志るどくりんむ天皇此以字云々

補續日本紀延曆三年相山背國乙訓
郡長岡村地為遷都也

十年とんひ正月云々

補日本後紀延曆十二年正月甲午遣
大納言藤原小黑麻呂元大辨紀古佐
美等相山背國葛野郡宇太村之地
為遷都也沙門賢環亦奉勅相之云々

此地の神とくりんむ天皇此以字云々

補青龍 白虎 八四方列宿ノ名ナリ和銅
ノ詔ニ四禽叶圖ト是ナリ又或説ニ
云平安城ハ九ノ方ニ流水アリ是ヲ
青龍ト名ツク 按ニ鴨川ヲ
云ナルヘシ 前ノ方ニ澤
田アリ是ヲ朱雀ト名ツク 鳥羽田ノ
類ナルヘシ 右
ノ方ニ大道アリ白虎ト名ツク 朱雀大路ヲ
云カ北海ヨ
リ南海ニ達ス 後ノ方高山アリ玄武ト名ツク
比叡愛太子等ノ
山ヲ云ナルヘシ 又 吳子云龍頭者大山
之端必九 青龍 右 白虎 前 朱雀
後 玄武

かとしの神

補日本後紀延暦十二年二月遣參議治

部卿壹志濃王等告遷都於賀茂大神

多ん曆十二年十一月廿三日

補又云十三年十月丁卯此日遷都云

去りて八尺の人形とけく

補大和本紀云延暦十三年二月都移西京

皇法不絶限迄未代此京外不可移勅制

坐而以土造八尺人形永守王城云舎東山

頂埋給若有王城事時必可動搖云々是名

將軍塚又田邑傳記云弘仁二年五月薨葬

於山城國宇治郡栗栖村有勅調修甲冑

兵杖劔鉞弓箭備鹽令合葬向城東立寔
之其後若可有國家之非常天下之災難者
件卿塚内宛如打鼓或雷電云々按ニ今ニ
東山長樂寺ノ峯ニ將軍塚ト云傳フル地ア
リ又或クハ田村將軍ノ塚ヲ稱スルカ一決シ
難キ事ナリ世ニ將軍塚ノ鳴動ト稱スルハ地
動ナルベシ又按ニ延喜神祇式ニ新宮ノ鎮祭
ニ太刀弓矢ヲ用フル事アリ此ノ如キ事ヲモ
附會セルカ

平安京の平安城とをいひて云々

補日本後紀延曆十三年詔曰子來之民謳

歌之華異口同辞号曰平安京

嵯峨天皇の御時

補尚侍藥子ノ乱第二卷ニ出夕リ

五本七のしりりりりり

補定俊按ニ畿内五州ノ地河内和泉ハ狭女ニ
ノ論スルニ足ラズ昔ニ難波ノ都アリトイハレ
瀕海ノ地ニノ怒潮暴濤ノ畏レアリ諾樂ノ
都トイハレ炎旱ノ時ハ井泉枯涸ノ憂アリ
今ノ京都ハ石件ノ憂ナクメ東ニ湖水アツテ
東海北陸ノ漕運ヲ便リニ南ニ淀川アツテ
西海山陽等ノ漕運ヲ通ス物語ニ稱スル所

此ノ如シ

今ハ過々とり切つて車るふのたやとつりあふり
ひくま

按此段言舊都荒廢者實不然是時群臣
大半猶在舊都矣

補古へ大路ヲ十丈トシ小路ヲ四丈トスル
車ノ行き千ガフ爲メナリ

新抄の事

ちんものりあふり

補工卿以下百鍊抄ニ同シ奉行ノ辨凡中
辨經房ト凡少辨行隆ト兩人ナリ物語ニ

行隆ヲ前官トス誤レリ

一条より志も五条ナシハそあきてそれより志もいふり

同年六月十五日或秘記云己別名並衣隨身二

人同相從先系内湯女房 之工少 以後人兼時拓

政女經房跡也昨日丁被召向之三ヶ条亦子

細字

一凡系条里不足事

一右南河及五条東河及河院西大路不足之条

一河様式多地球少若若被縮名城を

中云河依地形之廣狹被定際理之進退不
是之系略雖少中如被注下志裁於平安城

殆一得過才欲隨之被縮之域行雖之有或
若一被縮之之町數在之有議定之南如五
町東西四町為竹

一右系平地不來事

右宮城西有小山隔伴山丁被用之地隔山之系
如何加之平地不來山谷相交被用右系不可及
之難也

申云如被作下之山谷相交之下不平等云
專難用系如之地在位非大山非深谷湖
成功之盡回平地也又常時於不可及事之
妨之忽陸云之沙法行事之有亦如行事隨

便宜丁被相斗也

一大葺會事

右任式又今年一被行之事知日以前之域
若能出來之竹何事一被行之事遷都大葺
會皮是共大宮也管令町取被遷行之事
多民力定被在竹柳一被進退式
以前奈一殊加斟酌一令斗言上給之依
新院以氣之言上為件以竹肯丁令申上給
經房長候紙首謹工

申云謂大祀指遷都共是國家重事也
相並被行之事費用多欲豐遷中舊都

被遷大嘗會之後一向遷都之沙土
直且乞奉神事之不便欲遷都之云
之故也但遷都事必不可被忘之云
又云勿論陸渾延引大祀禮式以
米曾云以例仍新之之造宮侯
非終之功乞括之備禮儀之取
之或不日之功可被果遂之業
不丁叶乞繼陸云例延引之并
行經房云外祀勅申云七月以前
而後之主之米被引大嘗會之例
大同弘仁是也一大申云若是
括式以前事也不足為例云云
又云於新之被引大嘗會如竹
乞引之造宮雖

叶仍當時所取亦少之造加舍屋被行如何

申云於離宮被行大祀之条繼陸有古昔之例等

誰之行也 此外經房有語旨亦

次系新院依石系御前項之退下渴女房亦此有時

忠心上於御前下經房朝臣仰下改和田郊門

小至野一之土地早建木 寮可所定之地和田之

京町敷扶少雖儀万端衆人不甘心万民有苦色於小

至聖乞願之便宜也但惡心乘之不如乞遷都女房亦

詔云遷都万人莫不歎息或有流淚之族之上皇

不被仰乞非也又聞相少納言宗綱被拷問之乃

申稱之少亦也又乃陸來亦云於地改定小至

野ノ此旨ニ申シ由祿門取申也
行事友

補遷都行事所ノ官人ヲ云

ニツクんきま

神百練抄コレニ同シ但シ印南野

ハ水ナキニヨツテ罷ラル

いづくハ三條ノ廣路と

補文選西都賦ニ出タリ三條ノ廣路ヲヒラ

イテ十二ノ洞門ヲ立タリトハ宮城ノ制ニノ都

城ノ制ニアラス十二門ノ名拾芥抄ニ出タリ縦

横ヲノク三條ノ廣路アリ又通親ノ特議ニヨ

ツテ先ツ里内ヲ造ルト云コト諸記ニ所見ナシ

み条ハ大納言

補百練抄ヲ按ルニ今年十一月十一日遷幸

福原新造内裏入道大相國所造進也

網内裏造進ノ事所見ナシ

いみハ乃

補日本紀仁徳天皇元年都難波是謂高

津宮即宮垣室屋弗聖色也楠梁柱楹弗

藻飭也茅茨之蓋弗剖齊也

いづる乃

補同四年詔曰朕登高臺以遠望之烟

氣不起於域中以為百姓既貧而家無
炊者云々又詔曰自今之後至于三載悉除
課役息百姓之苦云々

花の庭云々

補吳越春秋曰楚靈王立建章萃之臺
云々云々位舉曰今君為此臺七年國人怨焉財
用盡焉年殺敗焉百姓煩焉

あしと云々

補史記秦本紀曰二世皇帝元年四月後作

阿房宮云々七月戊卒陳勝等反故荆地

云々

補淮南子云堯之有天下也茅茨而不剡

採椽而不斷大輅不畫云々

たのち宗乃云々

補通鑑綱目ヲ按ルニ唐太宗九成宮

ニ幸ノ馬周諫人飛山宮ヲ作テ魏徵

諫ム又大明一統志ニ楊大年が談苑

ヲ引テ云驪山絶頂有翠微寺本唐

武德初之太和宮也貞觀勅名翠微宮

太宗嘗避暑其上又于此地上仙云々

物語ニ民ノ費ヲ憚テ驪山ニ幸セサ

ルコトヲ云飛山宮ヲ誤レル者力

月尺れ事

六月九日の新紙れ事

補按ルニ百練抄ニ依ルトキハ六月九

日ハ點地ノ初十リ秘記等ニ依ルトキ

ハ十五日ニ至テ點地ノ議十ヲ一決セ

ズト見ヘタリ十一月十三日ヲ遷幸ト

ス百練抄十一日ニ作ル

人々名下乃月とん

補須磨ハ棋津明石ハ播磨淡路迫

門ハ淡路繪嶋モ同ジク淡路十リ白

良吹上若浦ミナ紀伊十リ住吉難波ハ

撰津十リ高砂ハ播磨十リ工ニ挙ケル

所ニ十月ノ名所十リ

近海かり乃大

皇太后宮多子大炊御門右大臣公能世宇治元

大臣養為子即第一卷所稱二代后是也

補近衛院ノ后是時太皇太后ト号ス實

定ノ妹ナリ

源氏のうち乃をよはうとてそのふれ西むとあ杖の名は

より行はるひとあうてうをすうとをともあうい

しよと

源氏楊非をのまよとてあうすいふ乃とす

うしよのきくもさしと月がうきゆたにたりわかれ
とよめてとされとうくたにけしてんくわたりす
のふいそむけよかりもんとちるわさひひらうか
しふちならぬれうとわたりうらるる人ひらうか
よすうぬくきてびとをまんよとてうらとてま
うりやうつわたりたきくまうりける月のよとた
わくうしよれいふうてこれとて月ハまはつ
りりりてうのささゆるふいりくうけよ白
やううしよいりうらるる人ハこのうらるる
うら月とてとらうらうられとてうらとて
うらうらとてうらうらとてうらとてうらとて

うらうらとてうらうらとてうらとてうらとて
うらうらとてうらうらとてうらとてうらとて
うらうらとてうらうらとてうらとてうらとて

ちうらひ乃小ゆ長

補紀氏石清水別當成清カ女弟ナリ

物との後人

今徳大寺家有稱物加波諸大夫者即其

裔也

補藤原経尹南家ナリ系圖云皇后宮

大進懐経子号物加者云或説ニ物加

者ト稱ゼシ前ハ上壇ト稱セシト云
之川けの事

此段總無所見

ぬんきのと

補変化ノ者トハ牧魅ノ其ノ本形ヲ改
メテ他ノ形ヲ為スナリ俗ニ狐狸ノ形ヲ婦
人小兒ニ変スルナド云類ナルヘシ一舎ニ滿
ルノ人面又ハ觸髅ノ自然ニ生ノ堆積也
ル事天地ノ間決メ無キ事ナリ物語ノ
作者共草ヲ記スルガ為メノ張本ナレベシ
ちるさるり出て云

補清盛早晨ニ卧内ヨリ出テ寢

殿ノ妻戸ヲ開キ前庭ヲ見ル人

義ナリ寢殿ノ母屋ニ帳ヲ置キ

衾枕ヲ具フル装束抄等ニ詳ナ

つなの肉

補寢殿階下ノ地ナリ泉石ノ所ニハア

ラス梅壺梨壺ナト云ガ如シ

くろさる乃び云

補爾雅ニ的類ト云是ナリ又望月ハ牧
ノ名好馬ヲ出ス所ナリ牧ノ名ヲ以テ

命せらる、カ又的頼ニ依テ形容セルモ
ノカ

いし天智天皇云

補日本紀天智天皇元年夏四月鼠産於

馬尾釋道顯占曰北國之人將附南國蓋

高麗破而属日本乎云

源中納言の心れりふりつりれりる結り

くろ夏しかきりりりり

按此事有聊相頼者壽永中齋院次官親
能以與頼朝匿雅頼家因使廳索搜於
雅頼家恐以此而附會者乎

節刀

有秘記

補軍防令云凡大将出征皆授節刀義

解云凡節者以髦牛尾為之使者所權

也今以刀劍代之故曰節刀云々又節刀

ノ義禁秘御抄ニ出タリ

大庭つら馬の事

甲さきりつら日お模のむれ任人大庭のら所系親く

系くつらるとりりりりりり

或秘記可考 九月十一日之記又詳見于東鑑 治承四年四月

九日廿七日六月十九日廿四日七月十日八月二日四日六日
九日十日十七日廿二日廿三日廿四日廿五日

補鎮守府將軍平忠通裔平太景義子

いづる

補急速大事馳驛申奏スト云是ナリ公

式令等ニ詳ナリ伊豆ノ國衙ヨリ進奏セ

ズノ景親ヨリ奏ラ告ル所以ハ清盛私

ニ景親等ヲ遣ノ仲綱等ガ遺孽ヲ捕

ヘシムソノウヘ目代ステニ戰没ス故ニ景

親ヨリノ告報セルナリ

小桑の弓矢改

補肥前守平維將裔四郎時家子

伊豆の目代

補東鑑ニ散位平兼隆ニ作ル伊豆國人

流人トス目代ノ事ナシ然レトモ秘記

ニ陵礫所司先使ノ文アリ目代ニテモ

アルベキカ

大肥土屋

補土肥二郎實平ハ笠間押領使平常宗

孫土屋三郎宗遠ハ實平カ弟岡崎悪四

郎義實ハ在司平義繼カ子

畠山

補在司平重能カ子重忠

こうりたふ

補岡崎四郎義實が兄義明○按ルニ大分
ト稱スルコト兩義アリ新任ノ國司大分ト
稱スル事朝野群載ニ出タリ見任ノ國司
大分ト稱スル事本朝文粹ニ出タリ朝野
群載ニ出ル者ハ曾任ノ守イニク國ニアルガ
故ニ遁避シ大分ト稱スルカ又本朝文粹
ニ出ル者ハ任限已ニ滿ルヲ以テ新司ヲ避
ル故ニ大分ト稱スルカ總テ公事ニ推シテ
カセテ用フベキ事ニハアラズ唐名ヲ用フ
ル類ニナルベシ次郎義澄ハ頼朝將軍ニ任

セラル、時同々ノ除書ヲ賜フ父義明モ曾テ
相模分タルヲ以テ父子同官ヲハカンタメニ
義明ヲ大分ト稱スルナルヘシ例ハ千葉胤正
ヲ新分ト稱スルガ如シ守ノ別名ニテハアル
ベカラズ重頼ハ弟大分トシ重忠ハ弟大分トシ
何ニ

補太郎平重頼畠山重忠が再従兄弟ナリ

福毛

補三郎平重成畠山重能カ従弟ナリ

小山田

補五郎平行平上ニ同シ

江戸

補 太郎平重長上ニ同シ

葛原

補 平武常秩父将恒が子

てして死すべし乃事

小山田れ引南まきけ

補 畠山重能が叔父ナリ 別當ハ莊園私官

ノ名

うけのふれたけつともふ

補 栗田開白道兼齋宇都宮座主宗圓孫

昔日なつとふとのつと

補 神日本磐余彦尊ナリ日本紀神武天

皇己未年春二月高尾張邑有土蜘蛛其

為人也身短而手足長與侏儒相類皇

軍結葛網而掩襲殺之云々

大石の山凡

補 按ニ日本紀雄略天皇十三年播磨國人

大石小麻呂ト云者伏誅ノ事アリ疑ラソハ

是ノ事ヲ謬レルカ

大山の皇子

補 大山守皇子ヲ云カ 紹運録 應神天皇第

ニ子又日本紀ヲ按スルニ 應神天皇晏駕

ノ後太子ニ於テ不利ヲ謀ル太子誘テ溺
殺ス

山田石川

非朝敵事見孝德天皇紀

補日本紀ヲ考ニ獲我倉山田石川麻呂

孝德天皇ノ朝ニ右大臣タリ譜ヲ被テ自

殺ス

より居のたは

非朝敵事見陽明天皇紀

補日本紀ヲ按ルニ大連物部守屋ハ用明

天皇崩殂ノ後欽明天皇ノ子穴穗部皇

子ヲ援立ス蘇我馬子諸皇子ヲ誘テ穴穗

部及守屋ヲ殺シ泊瀬部皇子ヲ立崇峻天

皇是ナリ

蘇我入鹿

事見齋明紀

補蘇我入鹿皇極天皇四年伏誅ス逆賊ナ

リ事ハ日本紀ニ詳ナリ

たをれまじり

補日本紀ヲ按ニ仁賢天皇十一年帝崩シ

太子イニタ立ズ大臣平群真鳥窺覩ノ志

アリ大伴金村連太子ニ告メ真鳥ヲ誅セシ

大正のふ田

以下至藤原仲成見續日本紀恐皆非朝敵矣
惟惠美押勝實為朝敵

補仁明天皇承和十年散位從五位上太室

宮田麻呂謀反配流於伊豆國云々續日本

後紀ニ詳ナリ

さいのふ

補承和九年春宮坊帶刀伴健岑但馬權

守橋逸勢謀反逸勢流於伊豆國健岑

隱岐國云々續日本後紀ニ詳ナリ

ひののかわり

補續日本紀桓武天皇延暦元年ニ詳ナリ

謀叛ニヨツテ伊豆國三嶋ニ竄セラル

名これ

補續日本紀廢帝天平寶字八年ニ詳ナリ道

鏡が寵ヲ嫉テ叛ス乃チ伏誅ス

こりり

補早良太子桓武天皇同母弟ナリ延暦四

年藤原種継ヲ殺ス人故ヲ以テ淡路ニ流

サル

あつとれを后

日本後紀ニ詳ナリ

補續日本紀ヲ按ルニ皇后ノ所生他戸
親王ノ儲位ヲ失セルヲ怨テ厭穢ス凡
道ヲ以テ罪セラルル光仁帝ノ后ナリ
いよのちんりう

補平城天皇大同二年中務卿伊豫親
王潛謀不軌幽於川原寺仰藥而死
日本紀略等ニ詳ナリ

後系ひろつこ

補式部卿宇合ノ子續日本紀ニ詳ナリ

後系仲成

補宇合ノ孫田磨ノ事蹟前ニ見タリ

平内門後系純友

見于第一卷

わのりうりうむのたう

補今昔物語ヲ按ルニ安倍頼良ト云者

アリ父ヲ忠良ト云父祖相繼テ酋ノ長

ナリ頼良後ニ名ヲ頼時ト改ム貞任宗

任ハ頼時カ子ナリ征戰ノ事跡今昔物

語ニ詳ナリ

おのつよのほのりちり

補前ニ詳ナリ

宇治た府

按法性寺開白通憲入道可為朝敵乎否

補賴長知足院開白忠實子系圖云依被

申行亂逆世人号愚九府

愚法門のつゝ

補信賴前ニ詳ナリ

つゝ一とつゝ門小つゝら

補中右記ヲ按ルニ平師牧梟頭於西獄門

前樹上云々

まへせんといひてうみれえま

補宣制ニヨツテ柘木花ヲ發シ實ヲ結フ

平の事本朝ノ故事イニタ考ヘズ鵝鵝録ニ

唐玄宗鵝鵝ヲ撃テ春光好ノ曲ヲ奏セ

具ラレシカバ柳杏發折セリ玄宗指笑テ此

事不喚我作天公可手ト云コト見タリカ

クノ如キ事ヲ誤レルモノカ又飛禽ノ服

従スルコトハ下ノ鷺ノ故事ナルベシ

延長乃帝沐ひんあんの事なりて

補勅宣ニヨツテ飛鳥ヲ捕フルコト神泉苑ノ

故事所考ナレ姓氏録云垂仁天皇々子登津

別命年向三十不言語于時見飛鵝問曰此何

物爰天皇悦之遣天湯河術尋求未詣出雲國

宇夜江捕貢之天皇大喜即賜姓鳥取連

又鷓鴣ヲゴイサギト訓ス頸ニ赤毛冠アル
ヲ以テ此位鷺ト称スルカ賜緋ノ詔ニヨツテ
始テ称スルニハアルニジ續日本後紀仁明天皇
承和十四年十月辛亥授双丘東墳從五位
下云々天皇遊獵之時駐蹕於墳上以爲四
望地故有此恩又曰壬子双岡下有大池
池中水鳥成群車駕臨幸放鷓鴣隼拂之云々
按ルニ彼此ニ依テ附會ノ説ヲナスナルヘシ
らんゆゑの事

見于史記

又いふ

補史記ヲ考ルニ太子丹ハ燕王喜ノ子ナ
リ秦ニ質タリ秦王遇スルニ禮ナシ故
ニ歸ラニコトヲ請フ鳥白頭馬生角ノ事
燕丹子ニ出タリ機發ノ橋ヲ作ルニ機發
セズトアリ亀ノ助ヲ得ルコトハ晋ノ毛寶
カ故事ナリ荆軻田光等ハ史記刺客傳
ニ出タリ荆軻が田光ヲ薦ムルニアラス田
光が荆軻ヲ薦ムルナリ秦舞陽ハ燕ノ國
ノ勇士ニシテ年十三ト刺客傳ニ出タリ白虹
貫日太子畏之ト魯仲連ノ傳ニ出タリ咸
陽宮阿房宮史記ニ因テ記セリ長生

殿ハ唐ノ驪山ノ宮ノ名不亮門ハ漢ノ洛陽ノ門
ノ名ナリ始皇琴ヲ鼓セシムルコト史記正義ニ
出タリ

これハ今ハおぼも

補燕丹ヲ頼朝ニ比シ始皇ヲ清盛ニ比スルナリ

べシ

りんごののり

とうふたかのね

補系圖云平治元年十二月廿七日信頼卿大逆

父義朝與同對于官軍合戦之間相隨父在

戰場凶賊敗破之間義朝赴東國沈洛永曆

元年二月九日一身假形於商人赴東國方

之處於不破關河原為頼盛即等彌平

兵衛棟清被囚虜上洛出六波羅畢其後

属清盛經母池尼公偏可被原免刑戮之

由頻愁申云々依之被減一等被定流刑

畢同三月廿日進發配伊豆國比留嶋

たつおの

補元亨釋書ニ傳ヲ載タリ

わさ

補元亨釋書ニ藤原氏ニ作ル按ルニ其祖先

藤氏ニソ遠江ノ受領タルモノガ又渡過黨下ル

八人此より

補大日ニ於テハ四佛四菩薩ト称シ不動ニ

於テハ八大童子ト称ス別名同縣ナリ

大聖不動内王此内使よらん

補不動明王矜羯邏制叱迦ノ説底哩三昧

具耶經ニ出タリ

大峯

補大峯ト金峯山トハ一ナリ大峯ハ總名ニシテ

種多別名アリ拾玉集云山とすぬかろハ

山とすぬかろハ

つゞき

補延喜神名帳云葛木一言主神社按ニ葛

木山ハ役小角経歴ノ地ナリ今修験道ニ葛

木ノ行者ハ中絶スト云々

高野

洞院家伊呂波字類按云弘仁七年建之弘法大

師御入定地也号金剛峯寺是也件處委注仍

畧之

又云本朝文集云金剛峯者弘法大師御建立

紀伊國伊都郡正南丹生大明神御領山地密教

相應之處修禪入定之砌也仰弘法大師者是

讚岐國多度郡扇風浦人也父者仇伯氏昔征敵
毛被斑土多母者阿刀氏阿刀夢見天竺聖人來入胎
中懷妊寶龜五年甲寅誕生也五六歲之間以泥
土作佛像以草木建立堂自夢見坐八葉蓮花之
中諸佛共語雖然不語父母何况他人乎父母崇之
号貴物云々大師告諸弟子等曰吾有劫世之思
明年三月之中也金剛峯寺付真然大德伴寺創
造未畢但大德自力不厚實惠大德可功加云々
吾初思也一百歲之間住世流布密教汲引蒼
生雖然禪師等所持至導也吾願又足也仁等當
知吾忌命於寸波中尋法於千里外終取傳道教護

之安鎮國家撫育萬民云々承和二年三月十五日

又云五臘入定來正一日寅刻自今以後不用人食

衍死

仁仁等莫悲泣又勿著素服吾入定之間往知足天

而叅任慈尊御前五十六隱餘之間往知足後慈尊

下生之時必隨從而可見吾舊跡此峯冥者古

佛舊基召集兩部諸尊所安置也見跡必知其跡感

同音則弄彼慈願者也吾末世資十萬親雅不知

吾願見一門長者及此峯寄宿者可必察吾法擬

陵遲尅吾必灾縑徒禪僧之中興此法非我執其

弘法計耳則承和二年乙卯三月廿一日寅時結

跏坐結大日定即奄然入定兼日十日四時行法

粉河

其間御弟子等共唱弥勒宝号唯以閉目无言語
為入定自余如身于時生年六十二夏臘四十一種
如世人不喪送而嚴然安置則准世法及七七御
忌弟子併以拜見顏色不表鬢髮更長曰之剃除
熱衣裳疊石壇例人可出入之許云々
本朝文集紀伊國那賀郡粉河寺千手觀音者靈
驗無比勝利有因故老傳云同郡有一搗師名曰
大伴孔子收獲為業山林為棲即點幽谷点踏木
時々為生計夜々窺猪鹿于時當于兀眼近有光
明其光赫奕克如大笑心慎奇特漸行其所隨行

号光去歸來亦如本屢見此事及三四夜即芟剪
荆棘結搦草廬爰心中至心叢造寺作佛之
願不經幾程有一童男行者暫成寄宿之語
孔子許諾行者喜悅語家主孔子曰檀越生
前願作何善根若有所願者吾當助成答曰
吾有一願草堂中欲造佛像而無佛工未遂其
願行者曰我是佛工當遂汝願猶師云吾為法
男男兒衆生兼尔吾息男男兒舩主任與州軍曹為其
歸鄉安穩欲造佛像也者行者隨喜相共行
向彼草廬爰行者示云我七日内可作佛像
其中問問勿來見若造願畢者吾往汝宅可見

上葦岬寺根中宮横女安宗寺又高禪寺又
上巖山之頂禪光寺千柿也

下岩岬寺今泉也鷲巖殿温岐蓮臺聖人
建立圓城寺胎蓮聖人建立伴寺一王子真高

權現依之康和元年造草堂中宮坐主水源
與野司等德滿聖人相諾建立烏琴之峯坤

方一有限見顯現八大地獄惣一百三十六義
句

富士寺

補延喜神名帳云富士郡淺間神社云按二
富士山毛同じく役小角経歴ノ地ナリ

伊豆箱根

補按二伊豆權現奈儿所忌穗耳尊箱根權現
奈儿所彦火々出見尊

信濃の戸隠

補拾芥抄云影光寺古佛遊行所云々戸隠
明神奈儿所手刀雄命

出羽のくろ

補按二羽黒山出羽國最上郡羽黒權現奈儿
所倉稻菟神本堂十一面觀音云々

くろとん板

津波寺

伊呂波字類考云高雄寺九者号神願寺其
後弘法大師改神護寺當寺者應神天皇御
願寺云々葺廢中絶之後和氣清麻呂八幡大
菩薩有示事興隆又經年序之後為弘法大
師誓跡傳置有行幸之由見國史
乞ハシクセクニモ云々

補類聚國史ヲ按ニ景雲中和氣清曆八
幡大神ノ託宣ニ依テ延暦年中ニ建立スル
所ノ寺ナリ初メ神願寺ト稱ス天長年中
改メテ神護寺トス

その法凡

補和氣氏系圖云垂仁天皇ノ裔平曆ノ
子

勅進帳といふをて

補暮縁ノ簿書ナリ掲讀スル所ハ簿書ノ
序引ナレハ

出

補釋氏要覽此譯云息慈云々

真如廣大

補真如ノ説起信論等ニ詳ナリ生佛ハ衆生
ト佛ヲ云々ノ字盛衰記漸ニ作ル謂ハ本
然ノ理ハ一ニノ聖凡ノ名モナキナリ

法性隨妄云々

補真如ノ自性ヲ守ラスノ一念ノ妄相ニ隨フ
ヲ云

十二因縁之峯云々

補十二因縁ノ訛四教儀等ノ書ニ詳ナリ
謂ハ一念ノ無明ヲ本トシ形アリ形アレハ惑アリ
リニスノ無明ヲ薰成ノ生々相續マムコト
ナキナリ

本有心蓮

補大日經疏ニ出タリ考ベシ

三毒四慢

補三毒ハ貪瞋痴ヲ云法界次第ニ詳ナリ
四慢ハ慢慢疑ニ七慢ニ作ル成論ノ大慢ヲ
加ヘテ八慢トス

佛日早没

補法數等ノ書ニ佛前佛後等ヲ以テ八
難トス

狂象重淵

補重淵ヲ盛衰記ニ跳猿ニ作ル跳ヲ蹕ニ
作ルヘシ狂象蹕猿トモニ遺教經ニ出夕
リ

三途四生

補法數等ニ詳ナリ三途ハ火血刀ヲ云四
生ハ胎卵濕化ヲ云

無ニ顯章

補法華經云唯一乘法無二亦無三云

聚沙為佛塔

補法華經方便品ニ出タリ

治承三年三月日

補百練抄ヲ考ルニ承安三年四月廿九日

高尾上人文覺賜檢非違使依狂氣也五月

十六日被流伊豆國云々物語ノ年月大

ニ相違ナリ

又云云々乃事

とけつもの

補宇多源氏宮内卿有賢ノ子

とん

補和琴ハ六絃ナリコトサギト云物ヲ以テ

搔鳴ス左手ノ五指ヲ以テ按ノ調ニ合ス

風

補風俗ノ歌ヲ云拾芥抄ニ出タリ

ふい

補催馬樂ノ歌ヲ云今ニ集一卷アリ音

節抑揚ノ詳ナル其傳中絶スト云

てしししししし

補凡ノ宮商角徵羽變徵變宮ノ七音ヲ備

フルヲ調ト云黃鐘商仲呂羽ト云コレナリ

今ニ伶官ノ所謂ル一越平調双調等ハ調子

ノ名ナリ律ノ名ニハス燕樂調ノ説事林廣

記ニ見ヘタリ

とけの判友

補盛衰記ニ平判官ニ作ル

安藤氏と

補系圖ヲ按ルニ安藤ハ魚名ノ末流ナリ

とてく下のらととててて

補按ルニ右宗刀脊ヲ以テ文覺カ右手

ヲサツハタラク所ハ左手ナリ手ヲチ

ヤツト云コトイマダ考ヘズ然トモ手水

ヲチヤツツト云ヒ手脊ヲチヤウラノト

云ヒ手シテ物ヲ掬スルヲチヤウカイ手ヒト云フ是時

文覺が手ヲ携サスルヲ稱シ賤惡ノ餘リ

俗語ニ隨テチヤウラ携スト云ナルベキ

カ

ニのいんま

補法華經譬喻品ニ出タリ

法便

補放免ニ作ルベシ檢非違使廳ノ賤隸ヲ
ヲ云放免トハ奴婢ノ稱ヲ放免ノ良民ノ
列ニ從フヲ云ナリ

わろは

補和歌ニ詠スル所ノ安濃ノ湊ナルベシ

伊豆院宣入事

此段全虚談也

天れあふらと

補前漢書韓信傳ヲ按ルニ蒯徹が韓信

ニ詭ク所ノ語ナリ

之友をたうりて

補公卿補任ヲ按ルニ三官トハ參議皇太

后宮權大夫右兵衛督ナリ光能解官ノコ

ト治承三年十一月ニシテ基房ト同時ナリ

考證ニ此ノ段ヲ以テ全ク虚談ナリトス東

鑑ヲ按ルニ石橋山合戦ノ條下云以件令

旨被付御旗横上ニ專ラ以光ノ令旨ニ

依テ兵ヲ起スコト見ルベシ

富士川の事

去程よ右まほの依るじりんのうゝまより風すま

のハ福原よまゝせんききて今一目と勢のつねさ

手ふいとたうつそとらうとて大ね軍よハ小松枝電が

中平五

乃維盛副將軍ノハ薩摩守忠度伯大將ノハ上洛也
忠清ト先シテ於合ニ留シ三ニ百餘騎

治承四年九月一日或秘記云信少涿叛義
朝子年來在死所伊豆ノ武ノ七ノ日幸凶惡去
比陸礫野司之先使時出心知凡伊豆駿河
五ノ押領ノ又ノ為義是一去年來純然即過
而去五月亂逐之別赴坂東方ノ与力彼義
朝子大畧企謀及欲宛如將門ノ凡去年十
一月以後天下不靜是則備以亂刑欲鎮海内
之ノ弓夷戒之敢不怖之威誓勅起暴虐之心
乃來又不ノ鎮ノ事欲依大亂均ノ之ノ家ノ之ノ必

仁直服志也也七則刑戮猥レ仁義永廢天
下ノ之ノ災ノ孫ノ奉レ是レ一レ信ノ○同九日記云因東
有レ及レ逐レ之ノ因去五月大外記大吏史亦依レ百ノ系
院有レ誅レ後レ一レ逐レ討レ之レ也レ此レ矣レ宣下右大將被成
官符維盛忠度知度亦來レ廿二日下向レ之レ
世群賊終レ立レ百餘レ并レ官レ兵レ二千餘騎已レ及レ合
我レ凶賊亦遁入山中ノ之レ也レ唯日六日至脚至
來レ之レ信レ大將レ軍レ亦レ奔レ向レ若レ有レ後レ于レ夏レ欲
之レ者レ已レ上レ克レ○同十一日記云大吏史陸賊注
送宣旨如次

治承四年九月五日

宣旨凡大將凡中

伊豆回流人源初為忠相結山堂欲屬
孫當四隣四之秘送之全既絕常篇宜
令右邊衛權少將平維盛玳白冬河守
曰知度等進討彼初及与力榮榮
又东海东山西道堪氏曾若下令倫
進討其中接有殊功輩一加不次賞志
傳少を男の進討仲綱是素住國是度士小
大庭三郎宗也為件仲綱是避泊奥別方
先謀心私而也
經之召忽初之進亂出來仍合我之召遂
為初明木於岩孫上一因茲彼進為之也風
少欲之召海上總主任人分八部廣常安是利

太郎叔利保餘力之外障小有勢之志亦多
以与力を欲殺景親亦一之史之夜在脚金
來事及大事之但實否誰知如此事浮統偏
多欲又能野堪堪於事急送不尚能智与力
一之○十三日記云筑本官員後來云罷
入東山進討使之中來在二日之夜向之信の
小己与力来之○同十九日記云信少筑本
又有秘送名謀心私也進討使一之又熊野
事進日賊盛松而未及之也治之

補惟盛サキニ右女將ヲ以テ春宮權亮
ヲ兼又今年二月讓位ニヨツテ權亮ヲ

罷ラハル是時ハ少將惟盛ト云ベシ権亮ハ所
兼ノ官ニアラス

九月十八日ノ新報をきてゆふ十九日ハ三ノ朝ニ
つゞき居て甲子ノ日東出ハ一ノ朝ハ三ノ朝ニ
連

同元三日或秘記云惟盛朔日已下追討実東

凶賊使ホ入洛 一此日出福永此日今日入洛

七八日之間ハ有初途但以一昨日ハ出討ハ吉

日之故云々

同十月一日記云傳少去月晦比熊野港停

ハ敏王方徳是攻我ホ平死多未為居

又進江至任人ノ中彼石ノ志ホ禦之弓交

合戦云々九進日在ノ取ノ莫不卒有以武治

正下ノ世宣以ハ後式滅私代之也○同十

七日傳少追討使ホ志ハ彼至任人被射為

云々後少膠泥云々○元九日傳少坂東逆

賊黨教好野及取万追討使弱重極云々

滅我知滅盡之始也云々悲之

補出軍ノ日次物語ト百練抄秘記等相

違アリ

金ノ月人

補履輪類聚雜要抄伏輪二作ル

いふけ地

補額聚雜要抄沃懸ニ作ル按ニ伏輪ハ金袋十
リ沃懸ハ金塗ナリ

らんそたりのね軍さ盛る

補按ルニ将門追討ノ時發遣ノ將軍ハ藤
原忠文等ナリ貞盛ハ常陸掾ナリ秀郷
ハ下野押領使ナリ二人トモニ國兵ヲ卒
テ将門ヲ討ス京師ヨリ發遣スルニハア
ラス

むいハねてことだつきよ

補軍防令云允大将出征皆授節刀

内内んおん

補按ルニ内辨外辨トハ辨ヲ辨ニ作ル
ベニ辨ハ警嚴ノ意ナリ三畧ニ軍幕未
辨將不言倦ト是ナリ内辨トハ日月萃
門ノ中近衛ノ陣ヲ云外辨トハ承明門ノ
外ヲ云諸衛警嚴ノ處ナリ内辨ニノ事
ヲ行フハ第一ノ大臣ニノ當日ノ上卿ナリ
自餘ノ王卿ハ外辨ニ止テ召テ待テ門ヲ
入ルナリ延喜太政官ノ式ニ宴會ノ時大臣
侍殿上行事ト云コレ内辨ノ義ナリ

忠美れり

補盛衰記中儀ニ作ル凡ソ節會トハ
王臣會同ノ禮ナリ延喜式ヲ按ルニ節
會ニ大儀中儀小儀アリ初位以上預ルヲ
大儀ト云ヒ六位以上預ルヲ中儀ト云ヒ
大夫以上預ルヲ小儀ト云フ延喜近衛式ヲ
考ルニ將軍賜節カハ小儀ナリ中儀ニア
ラス

承平天変

補純友カ乱ハ承平六年ニ起テ天慶四年
ニ亡ブ將門カ乱ハ天慶二年ニ起テ同三
年ニ亡ブ

と夜ハさめされ平れふりり

補百練抄ヲ考ルニ天仁元年但馬守平正
盛隨身源義親前對馬守并即從四人首
參洛云々中右記因幡守平正盛ニ作ル

とみまらて

補百練抄ノ文物書ニ同シ又中右記ヲ按
ルニ平正盛因幡守トシテ任國ニアリ其ノ
比近ナルヲ以テ命ノ追討セシム京師ヨ
リ發遣セシムルニ非ズ鈴ハカリヲ給ノ故
實正盛カ例ニテハアルニ節カヲ賜ハラ
サルノ例ナルベシ驛鈴ハ因幡ノ國衙ニ

曾ヨリ給ニ置ノ所ナリ

為軍ハ之ツのそんぢまき

補尉繚子ニ將受命之日忘其家張軍

宿野志其親援抱而鼓忘其身云

十月十六日ヨリヨリノ由清尺ニセリ

物

此以下之事實實記所載悉録于此焉覽者以之可考此書之實否

十一月一日或秘記云信少速討使非盛岡

已下被速討一已欲赴進北之石山傍

お察ニ史風少仍文向仔細一ニ凡逆黨

之能皆不知哉万務東山東海之流必使以

与力官軍之皆奉立千能務被速討之石僅

不過三ニ百餘之凡不能及右性昔以耳

速討使空彼速逃之例未嘗少事也而今云

至不及防欣依一人愚逆上旨令懲之能

殊歎一悲事也仏云定有冥助歎又少能

野湛増派系勝之能而流極之志又以不

能征伐積息し而之能因果付至歎一与之愚

之病士只不作三空亦明之護也

同四日記云信少速討使不向仔細只忠信行

赴仔細于他人万下入京云又信少速討使

今日入曉景入京知度入僅九余路作盛
退入又不過十路云先云月十六日差後河
水高楊宿先乞收水日代及有野武官之
案二千余路案甲斐武田城之弓皆悉被
伐取一日代以下八十余人切頭德路氏
云日十七日知自武甲方以使云相副送
維盛第主牒云未未能有見余之志于今未
遂主思幸加宣旨使有山下向能頃余上祝
志隔一日路波輒離余又波冲下有煩仍上洛
信系甲斐子孫河之弓相互仍向欲邊見余云
志清見之大怒使云二人切頭一日十八日富

士川色梅能屋明燒十九日下寄攻之支度
也云之弓計官軍皆之延波乞お安四千
仍路作手定陣後一各休息之弓官兵之
方救百路思以降高向敵軍城一其力于
拘留而始之勢僅不及一二千路武田方四
千餘云依不可及敵對竊以引退乞別忠
清之謀畧也亦維感志敢乞一引退之心云
亦忠清立次亦之把車三教列士卒之率
多以日之仍不能懸止自赴京治以來軍兵
之守力候以表換適而始之案之亦遂電
凡事之次亦亦通也事云今日云皆多

先使去馬元示子細書錄之大慈之承

述討使之日本命書君一紙報曝嚴不敵軍

豈力取武未少承述討使之曾士徒赴西路事

若入京洛非人下合服武不克之恥貽家尾

務之名為世欲早自路下暗趾也更不入京

之之然為竊入洛寄宿捨非違使忠綱之宅

書知度志先入洛在祿之八余家之大

器以信統紀之是有差漏欲但乞他軍陣

之棠流也子細推及短亮志也非元

日十一月六日山槐記云或有之述討使右少將

維盛期片今晚入舊都六波羅九月十八日著

致河本曰十九日杉杉黨營于不志河送使

不知其快維盛期片同所為於忠景之曰

兵法不勅使者強而此條私戰之時事也

今力述討使可及返答我先回彼方子細

一新者維盛期片從此言令痛問使名云

軍兵有數万教不可為敵對者曰此後斬

首一或非此事官兵總千余路更不

一及合我兼又法兵仕内心皆有賴期官

兵牙忠異心暫逼為老欲圍塞後陣

忠京亦回此事云欲我之心之同宿傍池

多教万俄志去其羽音成雷官兵皆疑軍

兵之寄本夜中引退上下競乞自燒宿之
座形中指報具亦志度知度不知此事退退
平忠系向伊勢國京師維盛胡片入京着近
州野路之時有五六十年之久此事式威之
兵法引退隨事云云故之或又誘之近日
門戶之屋言甚多此事定少實也故之國
卷統隨少及粗注後日歌女經房示送日東
國連討事乎中納言於盛年宰相威之下向
之也隨有沙估先停據守法德定安自海道
了下向之又獲西武士自船一也之薩摩
志度胡片冬川古知度統前古貞俊大矣
尉志德苗冬河冬石少將維盛胡片在迎の
國之由下國也新都有歎息云

十五とくふかるとてひくハ山と云

補古射法書云矢末に十五とくると云

補此ノ時ノ大名ト云ハ土豪ニノ名田ヲ多

大名

ノ兼併セルヲ大名ト云ヒ少キヲ小名ト

云名田トハ所帯ノ田ニ名ヲ付テ某ノ名

ト云フ莊ヲ某ノ莊ト云ニ同じ所帯ノ

主ヲ名主ト云此名今ニ殘レリ

甲子年正月卯の別より

補水鳥ノ羽音ニ駭テ官軍ノ敗七セルコ

ト東鑑ニ廿日ノ夜ニ作ル山槐記十九

日ノ夜ノ事トス

とらかのふとん

補東鑑ニ安田三郎義足ヲノ遠江國ヲ

守護セシメ武田太郎信義ヲ駭河國ニ

置ト云

落書

補匿名書ヲ云本朝文粹ニ櫻嶋忠信ガ

落書ヲ載タリ

五節れ事

甲子十一月八日大ね軍校の作亮かぬ惟盛福系

一ゆりのりり

見于上

鳥羽左の室後ニ五木内一れ急盗二人逃落り

と云

補忠清ガ盗ヲ捕フルコト別ニ所考ナシ

盛衰記ニモ是ノ事實ヲ載セス然レトモ秘

記等ニモ忠清ヲ称ノ第一ノ勇士トス又百

練抄ヲ考ルニ治承三年十一月前越中守

盛俊擲強盗トアリ

まりくとりまて

補公卿補任ヲ考ルニ惟盛治承五年六月十日右近權中將ニ轉シ補藏人頭トアリ

うられ氏アツクゆん

補忠文式部卿宇合齋參議枝良子

故事談云天慶三年二月八日天皇出御

南殿賜征夷大將軍右衛門督藤原忠文

節刀下遣於坂東國

さよちの火れけいして信の中かあさゆれり
れすいしうと

漢舟火影寒燒浪 駢路鈴聲夜過山

杜荀鶴秋夜宿臨江驛詩也

右文重なるもりん美をつれしとてせん

まじりつハ

補故事談云忠文卿勸賞汝汰之

時小野宮殿關白疑勿質依被定

申不被行_云其時九條殿刑疑ラ

ハ勿質賞疑許セトコソ侍レト被

申ケレト遂不被行依畏申此詞後日

奉富家之券契云又拾芥抄富家

殿ノ條下云民部卿忠文家也小野

宮有故不参云々。○按ニ忠文ニ重藤
ヲ相並テ称スルトキハ若クハ忠文ノ子
備後守滋望ヲ誤レル者カ

終りひりや、をまやれ

補將門が乱ハ天慶三年ニシテ忠文人
卒ハ天曆元年ナリ乱後六年ヲ経テ
卒ス食ヲ絶テ死スルニアラス

九条殿れ四末ハりてよ

補貞信公忠平ノ長子實頼ヲ小野宮
ト称ス第三子師輔ヲ九條ト称ス小
野宮トハ所居モ、惟喬親王ノ宅ナリ

ハナナリ

甲子ナリ入るおまの

補重衡ハ清盛第五子ナリ是ヨリ
先キ治承三年九、近權中將ニ任ジ今

年正月藏人頭ニ補セラレ

甲子ナリ入るおまの

補百練抄十一日ニ作ル

大嘗會

大嘗會之儀見于三箇重事抄貞觀式延
喜式北山抄江家次第及諸實記可追註

補神祇令云凡天皇即位惣祭天神

地祇義解云謂即位之後仲冬乃祭
下條所謂大嘗每世一年國司行事
是也

由けいも

補延喜神祇式云凡天皇十月下旬臨

幸川上為禊

さいちるうあをつらてま

補延喜神祇式云凡在京齋場者預

分設兩處悠紀在左主基在右

祇之祇具とそり

補負觀儀式延喜神祇式ニ詳ナリ

まうひだり

補リウビタウト稱ス泊兒編云唐舎

元殿前龍尾道自平階地凡詰曲七

轉由丹鳳門北望宛如龍尾下垂於

地焉兩垠欄檻悉以青石為之故謂之

龍尾道云々本朝コレニ依テ太極殿ノ

前砌ヲ龍尾道ト稱ス

廻り

補負觀儀式并延喜神祇式ニ詳ナリ

御湯ヲ供スル事江家次第ニ出タリ

大なるしりん

補大嘗宮ナリ真書ノ物語宮ニ作ル
大嘗宮ヲ作ルコト貞觀儀式并延喜
神祇式ニ詳ナリ

祓豆んとそまう

補江家次第ニ見タリ按ニ祭ル所ノ神
祇ハ宸儀歴世ニ親ク示授ス或ハ攝政
ノ儀アルヲ以テ撰録ノ諸家孫子ニ秘
授ス他ノ人臣ノ知ル事ニアラズ

大くくをうして大まいる

補巳午日ノ節會大極殿ニテ行ハル
豆いふふたうして祓ふ

補清暑堂ハ豊樂院ノ後殿ナリ御

神樂江家次第ニ見ヘタリ

うらぐたしとあんとく

補豊樂院ニシテ悠純主基ノ節會ア

リ

新ちる

補公事根源云因明天皇二年巳月

新嘗のりちるやう大くハ祓代り

心いり

五言

補公事根源云中れせ乃月とハ五言

春試とらふ常寧殿として主上御覽あり

百練抄ヲ考ルニ五節ハ新都ニテ行

ハル

三つ那の神さくらんとして

補古ハ宸儀神嘉殿ニ幸ノ事ヲ行フ

神嘉殿ナキ時ハ神祇官ニノ事ヲ行

フ

那つたこれ事

うしをよこしんをやうまうち政の入る夜

と那つたりま一として甲子十二月の日

俄に那つたりま

續古事談云云波羅のち政入の福糸糸

そとくふりわをぬすれがたほとつと

古事

とていごと古事一のりりほもあふんも

みすいさけまふん入ぬのんぞそれ

てとくりもいぬつたりりき方い

ととくもいぬつたりりき方い

とていごと古事一のりりほもあふんも

みすいさけまふん入ぬのんぞそれ

てとくりもいぬつたりりき方い

ととくもいぬつたりりき方い

晴不足風烈今日出御本津殿乃幸五條东河
院亭新院御幸御車六波羅杉並心家号他后
法皇御幸也與六波羅入通相玉亭号泉后云
六月二日俄遷御福永亭被奇置平安京依
天台衆徒新尸并东西逆乱俄又有遷御也
吾の宿下もふれハ八幡賀茂院縁之川守之為
山東山のこやうよつそ

按是時徙福原之公卿不過五七人殿上
侍臣諸司属官或雖及教百人平安第舍
豈盡荒廢乎今言寓宿于寺社者乃大
詞之潤色矣

甲子死方乃をい原氏れそむとせらん
乃之海智知盛薩摩ち右度はしと皆三義の跡
とらの由く奈向と

治承四年十月廿日山槐記云今日於新

院六波羅地被淺定、東國通礼事、乃於九

中、交経房細片奉祈、即日有石、仍未別恙

末、帝入人、又御系入、乃大后依承仁王命

中被示、乃大后實定直衣去五月、於新院被

仁王命、乃府、乃今被、末帝、而右府、若直衣

後季中、乃大后末帝乃大后末帝

也、此外、應石、人右府被、乃骨、之、中

綱言 祢在福系曾大后大夫入御檢校

祢仁王會又此外云条大綱實房在京大

支條能陸入以希各退出天台元之明雲

入北殊石依江列強動不審自去夜往

復迎意之也被示之亦控正云顯入力

仰使昨日向園城寺去夜由希今日又依

石希入之及晚以希作九大臣之東回凶

堂逐乱已及道以希有日心之関而又去夜

道以凶流亦來恙大津溪西去一云此言

事何歎一被針以式各相後一中者九大臣

目九大臣又被示以希云作初被示九大臣

去頭女進寄九女座下示之九大臣

云速討外不可有異後言上又被以由

自有由伏之心次又如法可有仰祈禱

之詞甚多然亦大概如此云云被

是速討使之条把之可也云云陸松一

云云不迴討則可被是速討使如風吹

亦云只名同心不從勅旨然去彼亦能

皆推絕日故不令傍減於官軍去彼亦

其能亦軍兵之同然一加其力誓不逃

討使先是官使一被為同而起之也後七

若有中旨備不肖勅令其將隨狀
可被計以之迷被責以州之其法固
以下加力可有技心在可有思意事
之即務去法社法寺在之被計之
兼又法系被計大法去之者中沙門
大細之被曰予之上沙門可被計仁王
徑法毗沙門法之也被計脚被計之此
乃事之被計之次才可有沙門事因之
再三入之意外云可中之事被計法
政事在之被事之然而事已及火急隨
被計若政難達彼亦之因然而之被之

事一而五將五之三之被計以書述討
余名武勇之輩左右之此上只在勅是
九大乃被計之先被述討述以之余不
一及吳議彼必凶能不美欣一四降之志
法勝、以下定四伏之九大乃被計云大畧曰
九大乃被定中承平康和彼奉寄一郡正神
宮先跡已存也一有正沙法之各被中之
約甚隆多詳不足惜只注大概以矣然
神亦奏少由來作國食之由也九
大臣人之退出

同十二月一日記云醫博士信康來曰

伊賀伊勢軍兵家近江新柏木入道曰
兄判官代山本兵玄海尉三人首之中
唯今所刀来者後斬首事云実云〇同
二日記云今日友玄海督知盛下為近江
使發札向道江國至干波河至江戶一政云
系中在家海別當宣立捕戎放遣置立云
〇同十三日記云後少今日近江國内
官兵被攻落馬関城折首二百余人云
補百練抄云十二月二日東國追討使
左兵衛督知盛已下發向云
奈良炎上の事

右友の別當事

補有官別當十リ拾芥抄云勸学院
依長者宣以氏辨為別當又有六位有
官無官別當

三つらり乃玉

補抄十リ古へ五月五日武徳殿ニシテ
抄抄ヲ命ゼラル西宮抄ニ出ツリ按
ルニ野乘ニシテ抄十リ今一正月
ニ小兒ノ玉ヲ弄スル其遺法ナリ

左ましのふれらんひまよ

補本朝文粹三善清行意見云諸國

檢非違使掌紘境內之奸盜禁民間
之凶邪之國中追捕及斷罪一向委
此檢非違使云

大將軍之兵中將軍劉中亮迴盛如合之
勢何方餘路方人之數向之云

治承四年十二月廿五日山槐記云依河南
劫凶黨益人派重劉翔片率數千軍兵發
向今夜宿宇治云 ○廿六日記云天晴雨
雪降後宇重劉翔片今日過宇治依
而官不發向之 ○廿七日記云後宇南
劫追討使重劉翔片宿狗先陣阿波云任

人民劫大支成軍兵向泉木津为一陣与
衆寇合戰矢放一矢依日暮不戰 ○廿八日
記云未刻南南方有煙若官兵放火南
劫入夜於有火克同卷云官兵於泉木
津合戰及後河南衆寇放火在家又云官
兵自河内云越未曾地之間為流徒被及
却死云甚多凡南劫兵勢感云後宇官兵
燒木津於奈良坂合戰良久不為遂又被
及敗義興福寺合戰於不禦得流徒皆退
散官兵放火取之家其間东大寺真福
寺力灰燼云官兵所力歛免流徒取力歛

不分明此事正月一日下風少東中也其
同子細批注元日曆于時東大寺別當法
誓大僧正禎喜仁利寺人真福寺別當權僧
正玄緣古廿四日依脫物入滅極別當權
如僧別當後玄秋比入滅五別當闕之同
之氏院別當右中兵兼光朗片之後日宿
曜師大威儀師杯哭而送之堂舍燒亡祀
日治承四年十二月廿八日為官兵被燒失
所

合

真福寺内 堂卅八宇 塔三基

金堂 講堂 東金堂 西金堂 南山堂

北山堂 泐堂

鐘樓 經藏 寶藏木 四面廻廊 三箇僧房

南大門 中門 中宮泐塔 觀自在院 東山堂

一乘院 唐院二 松陽院 東北院 傳法院二

北院 觀禪院二 西院 五大院二 四藏院

奎院堂 大東院三 塔一 發志院 中院二

新院 二階堂 北戒壇 己上 堂舍

修南院 勅使房 小政所 齋殿 松室

東院 大湯屋 南戒壇 稻江院 莊嚴院

一言主宮 惣宮 妙見 北院二所 五邊房

大窪 小戒壇 布留明神 旗所 寔殿

以上九下神社此外僧房不知教云法号堂少

之在之

同寺外

花教院 花林院 相應院 已上堂

上宗院 金對院 随心院 安養院

竹林院 灌頂院 西心院 淨古院

查林院 聖教院 多門院 御所

真宗院 宿院 孝養院 本殿

法雲院 教王院 運光院 十理院

院中塔 春日中塔 仇保殿 利原

菩提院内

本堂 惠心院三 淨古院 茶師院

因明院 堂如院 弥勒院二 黄菌

龍花院内

元真寺邊

玉花院

東大寺内

大佛殿 講堂 食堂 四百廻廊

三百僧房 戒壇 無勝院 安樂院

真言院 茶師堂 東南院

八幡宮 氣比 氣多

已上三ヶ寺兩院内外堂舍僧房在家不知
敬燒失一内佛一拜不奉取出是依恐官
共乙

野殘

真福寺内小房二宇

东大寺内堂舍少、寶務僧房少、龍花院内本

堂已下堂舍少、僧房在家三分二

新兼师寺過本堂并僧房在家

祿足院内 堂塔僧房

野田邑 僧房在家少

已上乞亦行取燒殘也

在春日御社官兵一切不入来乙

後少真福寺金堂釈迦眉間銀尺迦小像自灰中

求出其像其解不見云々

後日或信侶書云此起焉

東大寺

封五千户

東西寺二千户 即大尼下
三百户新兼师寺 依同寺作也

水田壹万町

以前持上件物遠限日月窮未來淹教細彼三

寶分依此類故新太上天旨以沐勝滿諸佛擁

護法兼實寶万病消除壽命延長一切不願皆

使滿足令法久住按濟群生天下大地人民校

示法界有情共成道以代主國王為我寺檀越

若我等與後天下與後我守其幣天下其幣
後誓其後代有不遂至邪賊之臣若犯若破
障而不乃者是人必得破辱十方三世法佛一
切賢聖之眾終南為大地獄無數却中承
無出離後十方一切法天梵天帝釋四天大
王天龍八部金剛密跡護法塔大善神也及
普天率土出有大威力天神地祇七廟尊靈并
依命立功大臣將軍之靈等共起大禍永滅子
孫若不犯觸教勸乃若世之惡邪陰子孫常
也應城早登覺岸

天平感寶元年潤五月廿日

奉勅 正一位行充大臣大宰卿橘富孫法兒

右大臣從二位藤原綱成

勅 藏後之神變云々
後以有靈迴直之受 大僧都法師行信

同元九日記云同卷云南郊象甚強官兵猶
中加勢云々後少時事極僻事之述河使
藏人氏重剛朝臣常泰山徒首四十九持叅
付奈幾力刀兒持法師一人擲取持叅云々

補公卿補任ヲ考ルニ通盛治承三年

十月兼中宮亮十一月更任越前守云々

然レハ是時越前守ナルベシ

わし

補五條ノ袈裟ヲ以テ頭ヲ覆ムヲ甲
袈裟ト云

うきしの店れけし

補莊園ノ役使ニ給シ置ク者ナリ惣
檢校別當寄人等ノ目アリ朝野群載
等考べし

焦熱大焦熱ホ

補地獄ノ名ナリ三界義性生要集等
考べし

弘法ふいふ乃ちあられさ

補水鏡云敏達天皇八年とあり十月
新羅より秋巡佛とありてそのまゝなり
此の伝説は信者たてまつりて山階寺乃
東金堂よむし佛とハこの佛なりと
云新んゆとりの乃親世也

補盛衰記ヲ考ルニ傳法院ノ修圓
僧都ト云僧須賀多ノ池ノ邊ノ田中
ヨリ涌出セル十一面ノ像ヲ奉持シテ
安置スト云

常在石滅

補常在靈鷲山法華經ニ出ツ又涅槃

經云如来常住無有變易
實報寂光

補天台宗ニ云所ノ四土ノ目ナリ四教儀
等考ベシ

烏瑟

補名義集云烏瑟臘汝此云佛頂

白毫

補三十二相ノ一ナリ法數等書考ベシ

滿月ノ尊容

補面輪滿月八十種好ノ一ナリ法數等

考ベシ

八万四千のさうり

補觀無量壽經ニ出タリ

四十一地のゆり

補梵網經ニ出タリ

十鬼

補法數等考ベシ

法相

補彌勒菩薩ヲ祖トス解深密等ノ經

ニ依ル

三ろん

補文殊菩薩ヲ祖トス中論百論十二門

論ニ依ル

うん大五れ

補優填模佛ノ故事佛國記等ニ出タリ

又名義集優填此言出受毘首羯磨此

言種々工業閻浮提此言勝金

りん

補梵王帝釋ヲ云

龍神八部

補法華等經ニ出タリ

冥友冥衆

八丁ノ補十王經ニ出タリ



卷之八
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

